

サロン2 1 話題提供内容

浅井壮一郎

16世紀の日本は戦国時代、ヨーロッパは宗教戦争の時代でした。だが日本では17世紀になると徳川政権が成立し、最初の100年は、参勤交代・江戸100万都市建設等で膨大な需要が発生し経済が発展し、人口が3倍になりました。その間コメ増産が図られ米市場・米相場が生まれ、信用取引・先物取引・為替手形が生まれ、資本主義のシステムが見事に発展しました。西の銀本位制・丁銀と、東の金本位制・小判との間で、為替レート・為替相場が生まれ、通貨戦争が発生しました。経済的優位の西の商人は銀高を誘導し、銀の価値が海外相場の3倍になり、金が海外に流出しました。

このような経済発展政策には膨大な財源が必要で、幕府はその財源を小判増鑄で捻出しました。

だが金流出・金山の枯渇により金が不足すると小判の増鑄ができなくなりました。そこで勘定奉行荻原重秀は「信用さえあれば貨幣など瓦礫でもよい」として、金の含量を減らす貨幣改鑄を断行し、資金供給を続けました。これは正に財政出動による景気浮揚策

です。さらに重秀の貨幣に対する考え方は、後の「固定信用貨幣論」で、これを欧米で最初に実行したのは、南北戦争でイギリスの金融封鎖に対して、リンカーンが取った政策で「政府の信用だけで発行したドル紙幣」でした。これは重秀の 150 年後のことでした。日本資本主義は欧米より 150 年も進んでいたことになります。近代化の必要条件は、第一に資本主義の成立、第二に産業革命、第三に国民国家の成立とされており、それ故日本近代化は江戸初期に始まるとしたのです。

余談ですが私の本を読まれた方から、次のようなお手紙をいただきました。彼の友人に荻原重秀の子孫がおられ、「重秀の政策はケインズに通ずるところがあり、重秀はケインズの 100 年も前のことだ」と言っておられるとの事でした。

一方ヨーロッパでは 17 世紀になっても戦争は終わらず、さらに国際化し、30 年戦争という大戦乱になります。やがて全欧州が疲れ果て 1648 年のウエストファリア条約で、ようやく戦乱が収まりますが、その後マウンダー極小期という黒点消滅で大寒冷・大飢

饑になり、フランスでは 200 万人が餓死します。ルイ 14 世はそれでも贅沢を止めず、華やかな宮廷文化が繰り広げられました。ヨーロッパが実りある安定を取り戻すのは 1750 年以降で、これ以降人口の急上昇を開始し、わずか 50 年で人口が 1.5 倍になりました。このことからヨーロッパは日本より 150 年は遅れていたことになります。

だがヨーロッパでは 2 つの面で大きな進歩がありました。1 つは自然科学の発達でその最大のものが「ニュートンの万有引力の発見」です。いま 1 つは戦争文化ともいえるべき戦略・戦術・軍運営等の軍事論の面で大きな進歩がありました。

その最大のものが「戦意の重要性とそれを生み出す団体訓練原理の発見」でした。マクニールは「この発見は万有引力の発見に勝るとも劣らない発見であり、それ故ヨーロッパ軍が最強になった」と言っております。これは古代マケドニアのアレキサンダー大王の父が、出ると負けの羊飼いを、最強の長槍密集方陣に仕上げた、徹底した団体訓練の効果で、オランダ独立戦争で、マウリッツによって再発見されたものでした。ヨーロッパ軍の強さは、武器の強さだけではありませんでした。

この間のヨーロッパの事情を説明します。

16世紀初頭ハプスブルク家のカルロス1世が、神聖ローマ帝国皇帝・スペイン王に即位した時代から、フランス革命までを絶対主義の時代と言います。カルロスはこの時期絶大な権力を持っており絶対主義王制の始めでした。

1545年にポトシ銀山が発見され、欧州に大量の銀が送られる頃、カルロスを継いでフェリペ2世が即位します。彼は大艦隊を建造し、レパントの海戦でオスマントルコを破り、ポルトガル王位を継承し、その東方植民地を獲得し、「太陽の沈まぬ帝国」を築きました。

スペインの急拡大はポトシ銀山の銀を担保として、フッガー家等からの借り入れで賄われていました。だが銀が大量に出回ると物価が高騰し、銀の価値が急落しました。その上、虎の子の無敵艦隊が英国との戦争と、嵐により壊滅すると、南米からの銀輸送船団が艦隊護衛を失い、英国等の海賊船の餌食になり、銀入手量がさらに激減し、フェリ

ペ2世は破産に追い込まれ、フッガー家等も破産しました。

やむなくフェリペ2世はスペイン領での税金を3倍に増税。これに反発してオランダのカルヴァン派が反乱。これがオランダ独立戦争です。

その後神聖ローマ帝国皇帝を継いだフェルディナンド2世が、ボヘミアの新教徒を旧教徒に改宗しようとし、戦争を仕掛けました。これにフランス・デンマーク・スエーデン・オランダが介入し、これが30年戦争でヨーロッパは大戦乱になり、ウエストファリア条約で終息するのですが、世の中が変わりました。

多くの貴族が没落し、相対的に王達の権力が増大し、更に王達は戦後失職した傭兵達をそのまま雇い常備軍を創設しました。もはや貴族達は反乱が起こせず、世の中が安定し、王は絶大な権力を持つこととなりました。これが絶対主義王制の確立です。

だが常備軍は俸給制であり、経済負担を伴うものでした。そこで絶対君主はその財源が必要となり、税金では賄いきれず、他国からの富の獲得を目指すことになり、重商主義政策をとることになりました。それは私掠船による外国船の掠奪・重金主義と貿易収支

黒字による貿易差額主義でした。このころ王達は、資本家に商業・交易を許可し、その利益に税金をかける事が有効であることを認識し、それによる常備軍維持を考えました。これが重商主義でした。

その頃の欧州取引の主な商品は

穀物・塩・羊毛・織物・葡萄酒・鉄・武器でした。これらの輸出入に対し、各国は関税をかけ、自国の資本家・産業を保護し、自国製品の輸出を促進しようとしていました。そこで貿易戦争が起こりました。ルイ14世の蔵相のコルベールは「重商主義は通貨戦争である」と喝破しました。

だがこの通貨戦争は実際の戦争には発展しませんでした。

実はこの頃になると、各国が精強な常備軍を完備し、簡単に戦争が起こせなくなっていたのです。戦争となれば双方が大きな痛手を被ることが自明となったからです。つまり勢力均衡による平和が実現したのです。そこで各国は膨大な需要があり、各国産品と競合しない胡椒・クローブ・茶・砂糖・キャラコ等の東洋産品に目を向けたのです。当初

ヨーロッパでは南米の銀の余剰蓄積があり、東洋産品は銀の恰好な消費地だったので、だがこの交易は極めて危険を伴うものであり、艦隊支援の必要があり、東洋交易は艦隊・軍の支援のもとに行われました。

だがヨーロッパの銀が枯渇すると、ヨーロッパはその代金として自国製品を強引に売り込むことになり、関税で防ごうとするアジアに対し、武力により無関税を強要しました。

これが帝国主義です。

その典型が産業革命により、生産性を確保したイギリス綿工業であり、インドのキャラコ綿工業を壊滅させました。マルクスは「イギリス綿工業の発展は、インドの綿職人の累々たる白骨の上に築かれた」と言っております。そのキッカケがプラッシーの戦いでした。

一方安定した社会は人口増を生みましたが、食料増産を伴わないものでした。これも欧州が海外に目を向けざるを得なかった一因でした。当然、欧州各国は自国の損害が少ない地域を指向しました。そこで欧州が東洋進出を目指した理由の一つはアジアが脆弱

で侵略しやすい地域であったこと、もう一つは欧州の古来より持ち続けるアジア蔑視観で、人格を認めない動物のような相手であれば残虐に制圧できるからです。これが植民地戦争なのです。

歴史観の歴史

人種差別： 最悪の差別は奴隷制度

奴隷供給源： 債務奴隷・戦争捕虜・人狩り（アフリカ・新大陸）

他に専制国家の隷属民

ヘロドトスはペルシア戦争を、自由人の民主国家ギリシアと隷属民の専制国家ペルシアとの戦いとして『歴史』を記述。自由の勝利と自画自賛したが、ギリシア経済は完全に奴隷労働に依存。軍務義務のみで納税義務もなし。政治・学問・芸術に特化。運動その他のコンペに名誉を求めた。

プラトンは、農業以外は奴隷の仕事。就業禁止。アリストテレスは農業も禁止。

根拠： 「奴隷は生まれつき素質が不完全で、魂も下賤な仕事の為にいじけて方輪になっている」とし、自分達の精神的・肉体的優位を強調。

『健全なる精神は、健全なる肉体に宿る』は差別用語。

差別的歴史観

* ギリシア・古代ローマの時代 ⇒ 奴隷の供給源はアジア

* ヨーロッパ人の世界観 ⇒ 三重構造世界観

- ・ 古代ギリシア・ローマ時代：「自由な市民の住むヨーロッパ」、次に「劣った人間の住むアジア・アフリカ」、その外側は「怪物・化け物が住む」
- ・ 中世： 「キリスト教徒＝選民の住む地域」、次に「その外の異教徒の住む

地域」、更に「その外の化け物的人間の住む地域」

- ・ 大航海時代： 西欧人は世界を巡り、「化け物」を求めた。

だが発見できず、代わりに「野蛮人」がいた。

- ・ 近代ヨーロッパ人の世界観

+ 「ヨーロッパ」－「アジア」－「野蛮人」の三重構造世界観

+ この世界観は国際法に引き継がれる。

「文明国」－「半未開国（アジア）」－「未開国（アフリカ）」

次に植民地戦争を説明します。

植民地戦争

アジア蔑視思想・政策の実践であり、結果としてアジアの劣等を如実に示すものとなった。アジアでは外交など必要なく、要求し、脅迫し、言うことを聞かなければ、武力で奪い取るだけ。

西欧に敢然と立ち向かい撃退した国。それが日本。

マクニール：「西欧の優秀な武器を装備し、訓練された小部隊がアジア・アフリカを簡単に制圧した。」 事実は世界史上驚嘆すべきことであった。

主な植民地戦争

プラッシーの戦い：(1757)

英国兵 850 人、インド人傭兵 2,100 人、野砲 8 門の英軍が 50,000 人のベンガル土候軍（仏支援砲兵 48 人、と大砲 50 門を含む）を破った。

従って、土候軍が武器で劣っていたとは思われない。明らかに戦意の差であった。

アヘン戦争：(1840～1842)

軍艦 16 隻、陸兵 4,000 の英軍が全清軍を圧倒。緒戦の広州市虎門の沙角砲台攻防戦で、上陸した英軍 1,460 を迎え撃った清軍 2,000 が戦死 292、負傷 463 の惨憺たる敗北で潰走。英軍：戦死 0、負傷 38

下関戦争との比較

軍艦 17 隻、陸兵 5,000 の四国連合軍は砲撃戦では馬関砲台・彦島を破壊し、下関占領を目指し上陸したが 2,000 の奇兵隊に敗退。

長州：戦死 18 負傷 29、 連合軍：戦死 12 負傷 50

アヘン戦争の背景： アヘン問題はイギリスだけの問題ではない。

中国商人がアヘンに群がり、販路を拡大し官憲がそれを見逃し、アヘン戦争直前には清朝予算の 80% の銀が外国に流出した。

中国は銀本位制で、正式通貨は銀で、重量で取引され銀貨というものはなかった。だが銅貨はあり、市場では銅貨で取引されたが税金は銅貨を銀に替えて払わなければ

ならなかった。銀流出は銀価格を吊り上げ 100 年で 3 倍に吊り上がりそれがそのまま増税となった。

そこで清朝は銀の流出を阻止する策を考えた。弛禁説と厳禁説である。弛禁説は「アヘン密輸はとめられないから、アヘンを合法化し栽培して税金を取れ」というもので、厳禁説は「密輸が止められないならアヘン患者・関係者を処刑して需要をなくせ」というものであった。

アロー戦争；(1856~1860)

1856年小帆船アロー号を中国官憲が立ち入り検査し、中国人船員を密輸・海賊容疑で逮捕。その際マストに掲げられた英国旗を引き摺り下ろした。英領事パークス（後の日本公使）は「アロー号は英国領香港船籍の船」と主張。「英国旗の引き摺り下ろしは英国への侮辱」として強硬抗議。さらにこれを利権拡大のチャンスと捉え宣戦布告。

一方フランスも同年広西省で宣教師が殺され、その報復として英国と合同で出兵。

両軍 5,600 が広州砲台を占領し、さらに北京まで攻め上り、北京市及び円明園を掠奪した。

フランスは以前にもベトナムで宣教師が殺されるとベトナムを占領した。

このような乱暴な英仏の対応は、日本に対しては全く異なった。

第一次東禅寺事件：(1862)

高輪東禅寺英公使館に水戸脱藩攘夷派の浪士 14 人がオールコック殺害を目的に乱入。オールコックは危うく難を逃れたが、書記官と通訳官が負傷。オールコックは攘夷運動の熾烈さを知る。

さらに翌年英水兵 2 人が殺された。だが英国は報復せず。

鎌倉事件：八幡宮で英士官 2 人惨殺。英国報復せず。

神奈川事件：仏士官惨殺。仏報復せず。

生麦事件：(1862)

生麦で島津久光の行列に乗り入れてきた騎乗の 4 人の英人を切った事件。外国側の対応は各国公使・文官・居留民が報復を叫ぶ。だが臨時公使ジョン・ニール中佐は冷静に戦力不足・不利を説き、騒動を抑えた。英海軍のキューパー提督は相談にも乗らなかった。これに本国外交部・海軍も同調し武力衝突を避け外交解決に切り替える。だが太平天国の乱が終息し、英艦隊・軍に余裕が生ずると本国外交部は態度を変えニール中佐宛てに生麦事件の処理に関し「幕府に謝罪と賠償金 10 万ポンドを要求」さらに「薩摩に艦隊を派遣し賠償金 2.5 万ポンドと犯人の引き渡しを要求せよ」と訓令した。

かくして薩英戦争が始まる。

薩英戦争：(1863・8)

当初英側は「艦隊の威容を見せつければ薩摩は屈服」と楽観視。

だが薩摩は屈服せず、英側要求を拒否。英側は直ちに 3 隻の薩摩藩汽船を拿捕・掠奪。五代友厚と松木弘安が捕虜となる。

ただちに薩摩砲撃開始。旗艦を猛攻。艦長以下戦死。キューパー提督も負傷。その後英艦は、アームストロング砲を初めて実戦使用し、薩摩砲の射程外から砲撃。薩摩はその威力に驚く。

英側、鹿児島市街を砲撃・破壊。それでも薩摩は屈服せず、キューパー提督は上陸を断念し、撤退。

英軍損害：死者 20、負傷者 50、艦隊 7 隻のうち 1 隻大破、2 隻中破。

薩摩側損害：砲台死傷者 10、市街地死傷者 9。

幕府朝廷も勝利を祝福。

『ザ・タイムス』は、鹿児島市街地への砲撃・破壊は文明国間の恥ずべき戦争行為として糾弾。議会も非難決議。

国際法で半未開国とされた日本を文明国として認知した。

『ニューヨーク・タイムズ』は「生麦事件の非は英国にある。このような無礼な行動は許されない。条約は日本の法や慣習を犯す権利を与えたわけではない。」と批評。米国人はこのような場合、直ちに下馬し、馬を道端に寄せ脱帽していた。

薩摩外交

薩摩は西洋科学・兵器の威力を知り、取り入れるべく和睦を模索。

薩英交渉：1863年11月、薩摩全権重野とニールが和平交渉。英側は生麦事件賠償に絞る。だが重野は断固拒否。交渉は暗礁に。だが決裂寸前に「賠償に応じる」と切り出し、条件として「軍艦購入の周旋」を提案。英側は意表を突かれたが、「以後の友好関係」を条件に受諾、薩英の友好関係が成立。回天維新の原動力。
以後薩摩の率直な交渉に英側が信頼を寄せ、多くの留学生を受け入れ、軍艦・武器を斡旋し、軍艦は「春日丸」と言い戊辰戦争で活躍。

下関戦争

下関戦争の背景

四国連合の下関遠征を主導したのは、英公使オールコック。彼は広東総領事を経て1858年に日本総領事として来日、後に公使に昇格。それ故、アジア蔑視の条約港文化を引きずって来日した。

条約港文化：欧米人に中国に対し「奴隷所有者の心理」を持たせるアジア蔑視の偏見文化。生麦事件の英国人の所業も正にこの影響。

オールコックは1862年に東禅寺事件に遭遇し、多勢の護衛の中に切り込んでくる攘夷の激しさと共に日本武士の激しい戦意を知る。そこで彼は攘夷運動阻止と香港のような安全な交易地を求めた。彼は東禅寺事件直後に、賜暇を得て一時帰国し、

1864年初頭に帰任した。その間下関砲撃事件・薩英戦争が起きた。その間の代理公使がニールである。帰任してみると攘夷運動はますます吹き荒れ、横浜閉鎖までが当面の課題であった。彼は帰任に際し、英外交部から「横浜での英国の地位保全と横浜より良い開港地の占領許可」のお墨付きを得ていた。

そこで彼は、四国連合軍の大戦力により下関砲台を粉碎し、攘夷の不可能なことを全攘夷派に知らしめること、及び下関近辺での香港のような開港地を占領すること、を考えた。彼は下関砲台を破壊するだけで長州は屈服するものと考え全面戦争には至らずに問題を解決する最良の手段と信じた。そこで彼はこの考えを英仏蘭の公使に提示し、覚書をつくり合意。

四国覚書内容

①海軍派遣 ②重要地点保証占領 ③開港適地

オールコックの狙いは③開港適地。

1864年8月、艦隊出港。長州砲台破壊。だが上陸戦で敗退。

停戦交渉：長州代表は高杉晋作。冒頭から「敗北を認め、以後良好な関係を築きたい」と切り出す。それに対しキューパーも「交渉中、旗艦マストに白旗を掲げる」と応じ、停戦条件を提示 ①大砲の撤去と砲台破壊 ②戦闘中止 ③野菜・鶏肉の供給。

和平交渉：藩主の書状に「和を請う」とあり、キューパーはこれに満足。「我々も平和を願う。貿易を望む」と応じ、和平条件提示。

- ①外国船への石炭・水・食料の供給。上陸許可
- ②新砲台設置禁止・旧砲台修繕禁止
- ③下関を破壊せず、その代償を要求

長州側反論：③項について「財政難で支払不能。過度の要求には戦わざるを得ない。」

命を投げ出すものはいくらでもいる。それを藩主が抑えている」と連合側を牽制。キューパーは「要求が過度になると長州は屈服より戦いを選ぶ」と受けとる。高杉は「攘夷は朝廷・幕府の命令によるもの。賞金は幕府に請求すべき」と主張。キューパーは「そうなら朝廷・幕府が支払うべき」と応じた。彼は明らかに「長州敗北容認」に満足し、戦闘継続回避を意図、その他の点で譲歩を重ねる。

連合側の要求には主目的の香港のような開港地の要求がない。実はキューパーは彦島の租借を要求したが、高杉が断固として拒絶し、撤回した。これを見て高杉は償金の支払いに同意する。

長州外交の勝利： 従来の歴史観では、下関砲撃事件での損害賠償とされた金銭請求が、実は下関砲撃回避の謝礼金だった。しかも賠償金は後日、幕府との交渉で決めるという。

和平交渉妥結： 長州は直ちに使節団を横浜に派遣し、債務軽減を各国に働きかけることを決定。使節団の横浜まで英艦便乗を要請。キューパーはこれを受諾。英長の

パイプが造られる。特に伊藤とアーネスト・サトウの緊密な関係。これも明治維新成功の一因。

使節団が横浜に到着すると、オールコックは大歓迎し、使節団がもたらした「藩主の謝罪の言葉と書簡」に満足の意を表明。「我々の要求する償金は、全て幕府が支払うことになった」と告げる。

その後の展開 したたかな英外交

オールコック外交の勝利： 彼は「長州藩主の謝罪文」を遠征勝利・成功の証として宣伝し利用。彼はこの成功を背景に「償金支払い」か「下関開港」かを幕府に迫る。幕府は「償金支払い」を選ぶ。一方で英国側はこの交渉において、賠償請求だけでなく、「生糸輸出制限の撤廃」「横浜鎖港要求の撤回」「条約勅許獲得努力」を要求し、従来の懸案を一挙に解決した。「江戸での交渉」の狙いはここにあった。英国は一枚上手だった。

オールコックは横浜で英雄になった。彼は有頂天になった。この事件は彼に染み付いた東洋蔑視の日本に対する見方を変えた。

エピソードがある。

日英合同観兵式

『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』： 「1864年10月22日は日英両軍が隊伍を組んだ最初の日として長く記憶されるだろう。」「この観兵式は日英関係の新しい時代の到来を告げた。」と報じた。

この観兵式は、事前に幕府全権若年寄酒井による幕府守備隊の閲兵式で、ミニエー銃装備の幕府軍を見たオールコックが「書物からだけの知識で整備・訓練された日本軍の進歩は見事」と感銘を受け、日英合同の観兵式を提案、翌日挙行されたものだった。彼は「この事実は時代の徴候として、あまりに重要である」と語る。

帰国： 1864年12月、彼は罷免され、惜しまれつつ日本を去る。訓令・報告が

往復4か月かかる時間差による現状認識のズレによる悲劇だった。彼は成功裏に凱旋した。

パークス外交

パークス： 14歳でマカオに来て、中国語を学び領事館通訳になる。上海勤務の時二人の英宣教師が襲撃され重傷を負う。英国は直ちに上海を海上封鎖し報復。1856年広東総領事に就任しアロー号事件に遭遇。和平交渉に参加。交渉が決裂しパークス等40人が捕らえられ半数が処刑された。生き延びた彼はサーの称号が授与された。

1865年7月、このような成功体験・栄誉と共に「中国人は力で押さえつける以外にない」という中国人不信・東洋蔑視の先入観をもって駐日公使として来日。

その6か月前、上海で帰国途上のオールコックと再会。二人は「武力なしにはこの地域の外交は役に立たない」という共通認識で同意。

かくして自信を深め、いわゆる条約港文化に益々染まったパークスは「新しい馬（日本）も古い馬（中国）も同じだ。乗りこなすのはたやすい」と豪語。

パークスは来日するとすぐに武力威嚇・行使による懸案外交事項の一挙解決を画策する。最大の懸案事項は条約勅許批准であり、その遂行（兵庫開港・大坂開市）、次いで関税引き上げであった。

四国連合艦隊兵庫来航

パークスは行動を開始する。仏・蘭・米の公使に「艦隊を率いて兵庫沖に進出する」ことを提案、合意を得る。

合意目的： 「賠償額300万ドルのうち、200万ドルの減免と引き換えに、

- ① 兵庫開港と大坂開市 ② 攘夷勅許 ③ 関税引き下げ 」

これは明らかに相手の立場を考慮したうえでの要求である。

この時点でパークスは「兵庫沖進出が、第2次長征征討の行き詰まりから幕府を救出し、幕府から感謝される」と期待していたという。更に「兵庫開港不同意の場合でも、1862年のロンドン覚書を想起させ、再認識させる効果があるとした。

ロンドン覚書： 安政条約は自由貿易を認め、横浜・長崎・函館が開港されたが、攘夷運動激化の為、1868年まで執行が停止された。

要するにパークスも中国に対する問答無用の武力行使は想定せず、WIN-WINの関係づくりを求めている。

1865年11月4日、連合艦隊兵庫沖到着。大坂に使者を送り、会談を申し入れる。
幕府代表として老中阿部正外が対応

会談は難航。やがてパークスが要求3項目を提示。「我々の目的は日本との関係改善であり、貿易拡大である」と付け加える。

阿部は、「それには条約勅許が必要」と応じたが、やがて「事は重大。提案を慎重に検討する必要あり」として猶予を要請して会談を終える。

これを受けて幕閣は混乱。大坂を火の海にするわけにはいかない、しかも今度の相手はアヘン戦争・アロー戦争と続けて中国を蹂躪してきた英国であり、その中で経験を積み、辛酸を舐めたパークスである。

幕府はやむなく阿部正外・松前崇宏を中心に幕府独断の要求承認を決定する。

徳川慶喜登場

幕府単独の無勅許条約承認の報に接した慶喜は大阪城に駆け付け、「無勅許承認反対」を主張し、取り敢えずパークス等に回答延期を申し入れる。

慶喜は京都に戻ると、朝議を動かし阿部・松前を更迭・追放する。これに対し將軍

家茂は辞職し帰東を決意。東西手切れである。

阿部更迭の報を受け、外国公使達は事態の深刻さに驚く。

それでも彼らは「回答期限内に回答なき場合は、我々自身の判断で行動する」と威嚇。

これを幕府は真摯に受け取る。

実は連合側も行き詰まっていた。威嚇したものの、大坂砲撃となれば仏・米・蘭が反対し、何より英海軍・キング提督が反対するのは明らかだった。前任のキューパー提督の鹿児島砲撃が糾弾された轍を踏むわけがなかった。パークスはこの交渉は見通しが立たないと諦め始める。

最早打開策は条約勅許しかない。そこで慶喜が伏見で、將軍職辞職し帰還中の將軍家茂を出迎え、帰還を思い止まらせ、京都に取って返し、必死の覚悟で朝廷を説得し、成功する。

彼は「勅許が得られなければ腹を切る」と宣言した。

その日は回答期限の日であった。

当日、老中本庄が来て「將軍自身の嘆願と慶喜の命を懸けた懇請により、条約が勅許された」「ただし兵庫開港は先送りされたが、ロンドン覚書の期限までには開港する」「関税は改定する」「賠償は支払う」と通告した。これはほぼ満額回答だった。

こうして前日まで絶望的だった難交渉が妥結した。パークスは「我々はこの国を平穩に導き、我々との関係を強化できた」と非常に喜んだ。彼はこの国は、カネと力で中国と全く異なることを知り、改めて勅許承認の重みを知る。

仏公使ロッシュも「幕府に対して強い疑念を持っていたパークスでさえ、今回の件で、その態度を改めざるを得なかった」と語る。

西欧列強の日本侵略の可能性

英国： キューパーを始め英海軍は撤頭徹尾、日本との戦いを避けた

仏国： ロッシュも前任のベルキュールも仏将校が斬られ、自国船が砲撃されても英国のような強硬対応では日本の人心を失うと自重

蘭国； 家康の頃から、領土野心を捨て、交易に徹し、日本との良好な外交関係を維持してきた。

米国： ペリー持参の大統領親書は実に穏やかなもので、遭難救助と薪水食糧の供給を求め、交易の利を説き、通商を求めた。

ハリスは横浜で村田藏六等の英語を教えたがサッパリ駄目で、因みに数学を試した。

こちらは完璧で、最後にハーバード大学院の問題までスラスラ解いた。彼は何たる国民だと驚き、日本の将来を確信した。

ハリスは条約交渉において対峙した幕府全権岩瀬・井上に対し「彼らは綿密に逐条の是非を論及し、余を閉口せしめた。かかる全権を持ったのは日本の幸福だった。彼らは、日本の為に偉大なことをした」と語った。

以上から西欧の日本侵略の可能性は皆無であった。

